

学校における 実践研究を 充実させるために

その企画・運営の工夫を学ぶハンドブック



- 学校研究の基本的な考え方
- 学校研究の実践動向
- 研究テーマの策定
- 研究組織の構築と運営
- 研究計画の策定
- 授業研究の企画・運営
- 若い教師への配慮
- 研究発表会の開催
- 研究紀要の作成
- 講師の活用
- 後進の育成
- 研究主任の学び

監修：大阪教育大学教授 木原俊行

平成22年3月

ケーションの指導に腐心している教師たちは、学校研究のテーマに魅力を感じられないでしょう。しかし、例えば、教科における表現活動や総合的な学習の時間における交流活動も視野に入れてコミュニケーション能力の育成の全体像を把握できれば、より多くの教師たちが、学校研究に自我関与しうるでしょう。

さらに、授業研究会の回数や実施時期には、制約がつきまといます。学校教育活動の年間計画の中で、いつ授業研究会を開催するのか、その目的をどのように定めるのかについて、検討すべき事項は少なくありません。例えば、ある小学校では、教師たちが、年度末の3月になっても授業研究会を開催していますが、それは、次年度の研究テーマ等を探るために実施されるものなのです。それゆえ、その学校では、年度末に、当該年度に学校研究の対象に定められていなかった教科の研究授業をあえて実施しています。

ところで、研究テーマの設定や年間の活動計画の策定は、いわゆる部会や分科会という、共同研究のサブグループの構成と連動しています。一般に、研究テーマに即した授業の実現には、いくつかのアプローチが構想可能です。そのアプローチごとに、専門部会＝サブグループを構成することで、密な議論や共同作業を繰り返し広げやすくなり、実践研究を深めやすくなります。学校研究は、全教職員で、グループを単位として、そして個人に委ねられて展開される、重層的なものですから、それらによる活動の整理や関連づけがきちんと図られる必要があります。

1.3 授業研究の工夫改善

言うまでもなく、学校研究の支柱は、授業研究会（研究授業とそれを題材とする事後協議会）です。ところが最近、事後協議会におけるディスカッションが盛んでないと嘆く声をよく耳にします。どうすれば、授業研究会が実りあるものになるのでしょうか。

この問題の克服を願い、研究授業後の協議会に、いわゆる「ワークショップ」など能動的な活動を導入し、教師たちが積極的に意見を交換する仕組みを取り入れる営みが普及しつつあります。⁽¹⁾

授業づくりは、もともとマニュアルのない営みです。また、総合的な学習の時間のカリキュラム開発のように、今日、カリキュラムは、「学校を基盤とする」という性格を強めています。個々の教師が自らの授業づくりを進展させるための機会として、また学校としてそれを組織的に展開していくための舞台として授業研究を性格づけるならば、教師たちの実践的知識やアイデアをどのように環流させるかが、十分に吟味されねばなりません。それは、授業者をいたず



写真 1-1 ワークショップ型の授業研究会の様子

4 研究組織の構築と運営

4.1 ポイント

研究組織を構築し運営することは、学校研究を推進していく上でとても重要なことです。例えば、「年度末に人事異動があったため、学校研究が滞ってしまった。」という声を耳にすることがあります。これは、学校研究が個人の力量に頼ってしまい、組織的に構築・運営されていないために起こってしまう悲劇です。

人事異動があっても、その学校における研究が継続し、また発展するように組織を構成し、運営していかねばなりません。

4.1.1 研究組織を構築する意義

学校研究は、管理職や研究主任が指導力を発揮するだけでは、長続きしないでしょう。それでは、その他の教師が、次第に、学校研究に対して主体的に関わりをもたなくなるからです。

上述したようなリーダーシップに加えて、個々の教師が意欲をもって主体的に活躍できる組織を作り上げることが必要になります。つまり、個々の教師が学校研究に対して何らかの役割を担い、主体的な関わりができるように、組織を構築することが大切です。

4.1.2 研究組織の編成

望ましい研究組織の編成は、学校によって異なります。学校研究がおおよそ軌道に乗っている学校では、研究組織を「研究推進部（委員会）」「学年部会」「専門部会」で構成することが多いようです。

まず「研究推進部」は、主に管理職、教務主任や研究主任、学年主任等から組織されるのが通例です。これは、学校の中核を担う教師が共同的に意思決定できる場面があると様々な調整に都合がよいからです。

次に「学年部会」は、日常の取り組みに即したグループですから、例えば当該学年の授業研究を進める上で大切な役割を果たします。

最後に「専門部会」によって、研究テーマに関して学校研究を多角的に推進するためのチームを組むことができます。つまり、学年の枠を越えて研究テーマに迫ることができます。



図 4-1 研究組織の編成